

相談のできる家畜診療所

様々に診療技術が発展して見が優先となる。そのため、とになった(写真1、2)。いる中、もっとも古典的では相手の気持ち、牛に対しての現在の、カビの乳房炎が年にあるが常に変化を必要とする思いなど、その対策に至るま一頭でるかでないかという状態では生産者とのやり取りが重態であるという。

しかし、こういった牛群に要であった。飼槽には飽食状態を維持するおける稟告に対して問診をとるため大量のサイレージ、「通所だけではうまくまとまらな

り、そこから問診をとってさるため大量のサイレージ、「通所だけではうまくまとまらな

らに核心にせまること、これるため大量のサイレージ、「通所だけではうまくまとまらな

ほど難しいものはない。しかを」という思いが、逆に牛のいこともある。その際は、診

し、私たち診療所では毎日繰前肢を飼槽へ踏み込ませ、戻力することで解決への一歩を

り返される技術でもある。ます際にサイレージを引き込む踏み出すことができるであ

た、個体診療だけでなく牛群う。例をあげると、「子牛が調

全体に利用し、問題発生に対だが、この牛への思いを尊重子悪くなる」という稟告があ

しての解決策を生む技術へとう。例をあげると、「子牛が調

なり得る。槽と牛床の隔てを高くするこ

子悪くなる」という稟告があ

る。稟告から状態を読み取

り、そこから問診をとってさ

るため大量のサイレージ、「通

所だけではうまくまとまらな

らに核心にせまること、これ

ほど難しいものはない。しか

し、私たち診療所では毎日繰

り返される技術でもある。ま

た、個体診療だけでなく牛群

全体に利用し、問題発生に対

しての解決策を生む技術へと

なり得る。

以前、「カビの乳房炎が最

近多い」という相談(稟告)

を受けたことがある。その際、

色々な質問(問診)を行い、

乳房炎の原因は、飼槽から牛

床へのサイレージ侵入である

ことがわかった。この場合、

対策方法は様々あり、そのど

れを選択するかは生産者の意



(写真1)



(写真2)

このように大きく設備を変

化させるといった場合には、

やはりチーム(生産者+診療

所+関係機関)として動いた

ほうが、より合理的であると

思う。一人では考えもつか

ないことを、色々な知識、経験

の人間がいる診療所また関係

機関、そして生産者との連携

によって発見することができ

る。なによりも、強い目的意



(写真4)



(写真3)

藤田 慎悟

(厚岸家畜診療所診療課)